

自己評価報告書(最終報告)

報告者

教員養成特別コース
／藤原 伸彦

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ－1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれている必要がある。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

昨年度に引き続き「思考力」をキーワードとした授業実践を行う。学生の思考力の向上を目指すのはもちろん、学生が実習において教師として現場に入った際、児童の思考を支援することができるような力量形成を目指す。学部生、院生に対しては講義の中で「考える」というキーワードを中心として話題提供と討論をしたり、ゼミ指導の中で学生の思考力が向上するよう方法論を示していく。また、院生の実習指導の中で、子どもの思考が促進されるような手だてを検討するよう働きかける。

2. 点検・評価

院生に、「疑問と思考の連鎖」に着目させることで授業計画および実践の質が高まった。（詳細は、教員養成特別コース修了生の最終成果報告書を参照のこと）。特に、授業の計画段階で疑問と思考の連鎖をチャート化する手法は有効であることがわかった。今後の院生指導にも活用したい。また、そのようにしてデザインされた実習授業において、児童は考える機会を得ていた。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

①特に、本年度立ち上がった学部「学校教育実践コース」の学生に対して、教育と学生生活の支援を行う。従来の学校教育コースの学生との交流や教職大学院教員養成特別コースの院生との交流を促し、学部生活、6年一貫を見通した学生生活のイメージを形成させるようにしたい。
②学生がボランティアで行っている活動(N*CAPや子ども歩き遍路)を企画・運営するのに必要な場所や資源を提供するなどによって活動を支援するとともに、その教育的な意味について振り返りを支援する。

2. 点検・評価

①、②ともに、年度後半についても中間報告で示した通り支援した。

学部「学校教育実践コース」の学生と教員養成特別コース教員や院生との接点として、前期の授業(水1限)と院生の中間発表・構想発表を設定したが、さらなる交流を目指す必要があるだろう。2012年度は、授業を教員養成特別コース院生室で実施したり、院生室で自主学習を行うよう促すことで、教員や院生との交流をしやすいような環境を整えるようにしたい。

II-2. 研究

1. 目標・計画

①科研費の助成を受けて実施している「授業実践映像データベース」とモバイル機器の連動に関する研究を推進する。特に、本年度は、モバイル機器を活用した学習を支援しやすい環境を整えることが目標である。

②学生の、実習における授業実践で児童の思考を支援できるような力量を形成する方法論について検討する。

2. 点検・評価

①については、podcast producer 2を設定した後、撮影した映像を最も効率的にモバイル機器で利用しやすい方法で提供できるか試行錯誤を続けた。その結果、撮影した映像を、市販のソフトで下処理した後、podcast producer 2で自動的にモバイル機器(ipod touchやiPad)で使える形式に変換→iTunesで読み込み可能にする、という手順が妥当であることがわかった。2012年度は、この環境で実際に教員養成特別コース院生にモバイル機器をつかわせ、模擬授業や実習授業の省察にどのように活用するか、またその教育的効果はどの程度かを検証したい。

②については、項目 I-1で既に述べた通り、授業における子どもの思考プロセスに着目するよう、「疑問と思考の連鎖」をチャート化させ、それを念頭に授業を実施するよう指導した。特にチャート化に着目した院生は、授業実践を繰り返すうちに描くチャートが精緻なものになっていき、子どもの思考をより分析的にみることができるようになっていた。2012年度も、この方法を使ってひきつづき院生を指導し、院生の分析的視点の変容についてみてみたい。

II-3. 大学運営

1. 目標・計画

昨年度終了した「四国の知GP」から継続して行われているe-Knowledgeコンソーシアム四国に関する業務に取り組む。

2. 点検・評価

「四国の知GP」から継続しておこなわれているe-Knowledgeコンソーシアム四国に関する業務に取り組んだ。2011年度は、学部「地域社会研究」(前期, 月1)を撮影し、eラーニングコンテンツとして整備、他大学から受講できるようにした。残念ながら受講者は0であったが、eラーニング環境を整備し、実働させたことは、大きな成果である。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属幼稚園が文部科学省から指定を受けた幼小連携に関する研究開発の研究チームの一員として参画し, 研究を推進する。
- ②現代GP終了後も継続している四国遍路に関する実践(学部「地域社会研究」の授業と歩き遍路体験, 「子ども歩き遍路」)において, 地域と連携したり, 地域との連携を深めたりする。

2. 点検・評価

- ①附属幼稚園が文部科学省から指定を受けた幼小連携に関する研究に, 一員として参画し, 研究を推進した。また, 「科学的思考」に関わる保育実践記録を, 過去3年間附属幼稚園との連携により推進してきた科研費研究において開発運用してきた遊誘財データベースに追加するなど, 成果を本学における教員養成に活かすようにもした。
- ②については, 中間報告で示した通りである。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)